

学芸員が見た東日本大震災（平成三陸大津波）

陸前高田市海と貝のミュージアム兼陸前高田市立博物館

主任学芸員 熊谷 賢

東北地方太平洋沖地震による大津波で陸前高田市博物館は非常に大きな被害を受けました。それに対して、全国の博物館関係の皆さん、大学、研究機関、学会の皆さん方から非常に大きなご支援をいただいて、今、レスキュー活動が続けています。ありがとうございます。これからも続きますので、ぜひ皆さんのご支援をいただければと思います。

市立博物館の1階で、「博物館資料を持ち去らないで下さい。高田の自然・歴史・文化を復元する大事な宝です」という紙を見つけました。誰が書いてくれたものかは分かりませんが、文化財レスキューをする上での私たちが考えているものがすべてこの紙に書いてありました。



被災直後

3月11日2時46分、あのとき私は海と貝のミュージアムの事務室にいました。三陸は地震がかなり多いのですが、それでも今まで経験したことのない揺れで、6分近くありました。間違いなく津波が来ると分かったのですが、これほど大きいものとは想像していませんでした。ミュージアムの台帳を持って逃げようかと思ったのですが、膨大な台帳を車に積んでいたら、もしかすると私はこの場には立っていなかったかもしれません。泣く泣く台帳は捨てて逃げるしかありませんでした。

30分後、県立高田病院の4階から当時の副院長さんが撮った写真がありますが、堤防を越えて市街地に津波が迫ってきています。やがて、病院の3階の天井部分を超えて津波が来しました。車などいろいろなものが混じりあった本当に真っ黒い水がどんどん押し寄せてくるという感じです。

私は市役所に避難しました。「堤防を津波が超えましたので、高いところに上がってください」という最後の防災無線の放送があってから、一気に上まで上がりました。隣に市民会館があって、そこは一段低い状態になっているのですが、最後の放送があったときに、市役所に入った人と市民会館に入った人、ただそれだけで生死を分けました。私は市役所の上にいたのですが、ちょろちょろ足元がぬれ始めて、しまいにはどこかのお宅の壊れた柱がここまできろろと入ってくるという状況でした。波が市街地に来るうちに、住宅の高さぐらいのがれきがブルドーザーで押し出されるような形で、ばきばきと不気味な音を立てながら、がれきだけが来るのです。なかなか言葉で言い表せないようなものも目にしました。引き波で、子供が二人、民家の屋根の上に乗ったまま流されていくという状況でした。

一晩ここで過ごしました。夜中の2時ぐらいに階段で外に出てみたのですが、がれきが逆流していたので、夜中までも津波は来ていたという感じです。

陸前高田市の人的被害・文化施設の被災状況

平成24年2月1日現在、死亡者数1,554名、行方不明294名で人口の約1割が犠牲になっています。市の職員も117名、約3分の1が犠牲になっています。実は学芸員で生き残れたのも私だけです。ですから、市の行政機能が完全にまひしたという状態です。私自身も家族の安否も全然つかめないという状況で、市役所の中で一晩過ごしてから、次の日からは避難所や被災者の対応にずっと動いていました。余震がずっと続いていたために、夜中に眠りにつきそうになるとぐらぐらと来るという感じで、睡眠もうまく取れなかったという状況が続きました。

陸前高田市立博物館、海と貝のミュージアム、図書館、埋蔵文化整理室の建物はすべて全壊状態で、多くの職員が亡くなられています。

陸前高田市におけるレスキュー体制

私がレスキューとして実際に動けるようになったのは3月下旬でした。それまでは避難所の対応に追われて、動きたくても動けないという状況が続きました。部長から「博物館も全員駄目だったので、おまえはミュージアムも博物館もみんなやれ」ということになりました。

レスキューといっても物の回収ですので、博物館資料を分かっていると回収率も下がってしまうと考えて、私の心当たりの人たちを11人集めて、4月1日から動き始めました。11人のうち7名が被災して、家族を失った方もいますし、家屋や車を流されたという状況でした。当時は食べ物もない、水もない、電気もないという状況で、レスキューを展開しました。

岩手県が宮城県と決定的に違うのは、宮城県は被災文化財等救援委員会がかなり早い段階から入ったのですが、岩手県は5月すぎに県教委からレスキューが正式に出されました。その間、黙って指をくわえていたわけではありません。岩手県は「学芸員ネットワーク・いわて」があり、学芸員は皆どこの館に誰がいて何を専門としているのか知っているのです。そのネットワークで、岩手県立博物館と遠野市立博物館の方々を中心にして動いていただきました。

陸前高田市立博物館

分類	点数
植物	14, 167
昆虫	30, 000
剥製(鳥獣)	304
貝類等	4, 836
岩石・化石	1, 349
考古	34, 229
民俗	23, 295
歴史	12, 357
美術	156
写真・スライド等	10, 663
文献等	13, 355
その他	671
合計	145, 382

海と貝のミュージアム

分類	点数
鳥羽源藏コレクション	20, 545
千葉蘭児コレクション	29, 015
鳥海衷コレクション	9, 704
柵山コレクション	24, 096
海と貝のミュージアム	24, 640
合計	108, 000

埋蔵文化財整理室（回収分）

分類	点数
市内遺跡出土土器	コンテナ700箱
貝層・配石遺構の石等	土嚢袋500袋

被災前の収蔵資料点数は、博物館が15万点、海と貝ミュージアムが11万点。埋文整理室だけが実数が把握できなくて、コンテナ700箱、土嚢袋500袋が回収できた数です。そして、図書館蔵書が8万ありました。4館で約31万点を回収しております。

市立図書館の被災状況

図書館は完全に波にのめられました。ここには岩手県指定文化財の吉田家文書という古文書がありました。最初は文化財レスキューの救援委員会の存在は全く頭になくて、私にその情報が入ったのは5月の連休すぎでしたので、それまでは自分たちだけでやるしかないと思っておりました。そんな中で、古文書の解説会の方々が市の教育委員会に掛け合って鉄の扉を破って古文書を引っ張り出したという情報が私のところに入りました。水損した紙資料を急激に乾かすのはまずいと分かっていたので、大船渡市立博物館に連絡したら「ごみ袋でも何でもいいから集めて密封しろ」ということで、いったんその作業をストップさせて、ごみ袋を調達して、それに全部入れました。本来は県の指定文化財なので県の教育委員会に連絡をするのですが、実際に動いてくれる一関市博物館に古文書を扱える方がいらっしゃいますので、そこに電話をしました。一関の博物館に連絡をすれば県立博物館に自動的に行くだろうと思っていましたら、やはり、一関の博物館の方が「県博と連絡を取って明日すぐ行く」ということで、必要な資材などを持ってきていただきました。

吉田家文書は引っ張り出しから回収まではかなり早くて、2日ぐらいですべて回収しました。それから、昭和30年以前の行政文書も同じように回収しています。



吉田家文書等搬出準備（4月2日）

海と貝のミュージアムの被災状況

海と貝のミュージアムは、観光的な要素が強いところで、窓ガラスがあったため、窓ガラスがあるところはことごとくやられてしまいました。エントランスの部分のがれきが一番多く、民家の屋根がそのままそっくり入っているという状態でした。海と貝のミュージアムは海岸線から 300m くらいのところにあり、海まではほとんど構造物がない状態でしたので、それでもがれきの量は少ないのです。

展示室の被害が大きく、半数以上の流出がありました。ケースの後ろ側や板の裏側、すき間にも入っていましたので、博物館に就職して展示ケースを壊すとは思わなかったのですが、それを全部壊して、とにかく思い当たるところはすべて見ました。

ツチクジラは今、国立科学博物館の筑波の方へ行っています。9.7m で 500kg ぐらいあって、これは最後の最後までどうしようかと悩んだのですが、最終的には科博の山田（格）先生にお願いして、6 月 29 日に移送していただきました。はく製ですが、表面を FRP のようなものでコーティングされていたのです。それが良かったのか悪かったのかというのがあるのですが、被災当初はひびが入ったところから海水が入り込んで、500kg が恐らく 600kg ぐらいになっていました。山田先生が最初にいらしたときに、お腹に穴を開けると水が一昼夜ずっと出続けていました。



発見の部屋（4 月 7 日）



ツチクジラの移送（6 月 29 日）

陸前高田市立博物館の被災状況

陸前高田市立博物館は昭和 34 年の開館で、公立の博物館としては東北で第 1 号の登録博物館です。総合ですので、自然史系から人文系まであります。

レスキュー前の状態ですが、海と貝のミュージアムと比べると、かなりがれきの量が多いのです。海側には窓がないので、最初、波が押し寄せてきたときには耐えていたのですが、波が引いたときに中に入って、渦を巻いて、収蔵庫の扉など弱いところをぶち破って向こう側に抜



1階展示室（4月21日）



1階展示室瓦礫撤去後：床面に50cm以上の砂が堆積

けていったという状況です。天井に届くぐらいのがれきで覆い尽くされていました。

海と貝のミュージアムでは砂は堆積していなかったのですが、こちらは床面に50センチ以上の砂が堆積していました。この中から1点1点掘り出す作業をしました。がれきなのか資料なのか迷ったらすべて回収ということで、回収を進めました。砂が塩水を含んでいるので、最後の最後まで乾燥せず、ふるいもかけられませんでした。サンプリングエラーではないですが、取りこぼしはあるはずだということで、砂はいったんすべて博物館の後ろ側に集めておきました。

1階の収蔵庫には地質、考古と自然史系の標本がありました。今、全国に行っている植物標本や昆虫標本がここにありました。マスコミの方々に「回収はどのぐらいできたのですか」と言われるのですが、回収だけで言えば7割、8割はいつていますが、果たしてそれが展示できるような状態まで復元できるかどうか。ガラスが完全に壊れて中に土砂が入っているという状況のものも多々見られました。

植物の標本は1点1点ビニールの袋に入れて木製の引き出しに入れていました。上の方や底部は海水が若干入ったりもしたのですが、間にあったものはそれほど海水の浸入もなく、復元



1階収蔵庫から搬出された昆虫標本
（岩手県立博物館：4月30日）



1階収蔵庫から搬出された植物標本
（岩手県立博物館：5月8日）

されたものが結構あって、ビニール袋に入れていてよかったなと思いました。

1 階研修室が博物館の心臓部ともいえる台帳があったところです。台帳は 1 割も回収できたかどうか、ほとんど持っていわれています。今後、資料の何が残って何がないのか突合の確認作業は困難を極めるとしています。

海と貝のミュージアムのレスキューは最初 3～4 人だけで始めて、岩手県立博物館と遠野市立博物館の方々全員そろったのは 4 月下旬でした。資料を搬出し、16km 先の閉校になった小学校に軽トラック 1 台で運んでいました。今であれば行って帰ってくるのに 40 分ぐらいですが、当時は道路状況も悪くて、行って帰ってくるだけで 2 時間かかりました。

4 月下旬から自衛隊の方々が本当はご遺体の捜索で入ってきていただいたのですが、隊長さんが上の方に掛け合っていて、「がれきを撤去しないことにはご遺体の捜索もできない」ということで、一次レスキューが終わる 6 月 17 日までずっと手伝っていただきました。それまで軽トラで運んでいたものを、部隊の方々が来てくれたおかげで、人は 30 人入る、2 トントラックが 3 台ぐらい来るということで、これで一気に加速しました。この方々がいなければ何月までかかったのだろうという感じです。

2 階の収蔵庫は、中の資料は完全に水没して、中はぐちゃぐちゃだったのですが、流出はほとんどありませんでした。この中には国の登録有形民俗文化財の陸前高田の漁撈用具が 2,045 点入っていました。収蔵庫は窓がなくて暗いので、投光器で明かりをつけながらやりました。

穴が開いているとか、通気性の良いものにとっ思ったのは、高田歌舞伎という歌舞伎がありまして、その衣装が入っていたケースです。中に真っ黒くなった水がそのまま入っています。この水が硫化水素のようなにおいを出していて、悪さをするだろうということが分かりました。

国の登録有形文化財のカッコ船は吊って下ろすかという話になったのですが、船体自体がもたないだろうということで、人力だけで、自衛隊の方 18 人で細い階段を下ろしていただきました。

2 階の収蔵庫から搬出された民具類は、既に約 2 カ月近くたって、わら製品などはかびが発生しています。塩の析出が見えている状況でしたので、これは早く処置しないといけないとい



自衛隊による回収作業協力（4 月 26 日）



自衛隊による 2 階展示室からのカッコ船の搬出（4 月 28 日）

う感じでした

先ほども言いました博物館裏に集めた砂の山を、見落としものはないかとすべてふるいにかけました。そうしたら、かなりの資料が出てきました。骨角器が 100 点ぐらい、市指定文化財の青銅製の銚子（さしなべ）もこの山の中から出てきました。この砂をそのまま捨てていたら、みすみすそれだけの資料を失っていたということです。私はもともと貝塚屋なので、貝塚もこういう手法を取るので、これは正解だったなと思いました。

埋蔵文化財整理室の被災の状況

埋蔵文化財整理室はほとんど建物が残っていない状態でしたので、最後にレスキューを行いました。市内の発掘調査で出てきた土器片やビニール袋に入っていたものが、砂の中から出てきました。コンテナで 700 箱、土嚢袋で 500 袋を回収できています。

回収で一番難しいのはどういう順序でやるかということです。私は、最初は海と貝のミュージアムだと考えました。貝だけしか展示していないので、資料の選別を考える必要がなく、とにかく貝であればすべて回収すればいい。海の近くで、まだ余震があつて、その後も津波注意報が出て、かなり迷ったのですが、一番早く切り上げられるだろうということで、海と貝のミュージアムから行いました。注意報、警報が出たときはこういうルートで逃げようと、みんなで避難路を確認しながら作業に当たりました。



埋蔵文化財整理室回収作業（5 月 18 日）



市町村教委による埋文整理室回収作業（5 月 24 日）

文化財レスキュー（二次） 保存へ向けた取り組み

一次レスキューが6月17日でほぼ完了して、文化財レスキューの二次ということで、この段階から救援委員会が入ってきてくれるようになりました。

閉校になっている旧生小小学校が仮収蔵施設になりました。当初はここも避難者の方々がいらっしゃるということで、2階の教室は使えないと言われましたが、最終的に、避難者は来ないということになって、全部使ってよしということになり、教室全部、体育館まで資料で埋まってしまったという状況です。運び入れた当初は、見た目はきれいですが、すべて砂や泥が付着している状態でした。

今回うちでやっていてよかったなと思ったのがラミネートのタグです。本来、民具に付けるラベルは荷札のようなものですが、それだと取れてしまうのです。私も博物館時代にずっと試行錯誤して、ラミネートにすればいいなということで、情報を記入して、ラミネートをかけて、ハトメで穴を開けて、たこ糸で結ぶという方法を取りました。これは完全に水に浸かった状態でも文字が読めましたので、水にぬれるときはお薦めのやり方だと思いました。



旧生小小学校仮収蔵施設保管状況（市立博物館資料 6月7日）



民具につけられたタグ

幸いこの小学校は水が使えたので、とにかく水に浸けて脱塩する作業をしておりました。鉄製品は本格処理するまでにはまだ手が回らないので、除菌・脱塩をして、乾燥させて、エスカルに入れて脱酸素剤を入れて、さびの進行を抑えて遅くするための応急処置をしています。手が回るようになったら、本格的に処理することになっています。

骨角器は私の専門の部分です。最初は、砂が付いているだけなので、洗って一晩水に浸けてエタノールでも振っておけばいいかと思ったのですが、ここで初めて海水損というのはとんでもないというのが分かりました。一晩乾かしてみても、べとつきが残るのです。脱塩が足りなかったのかということで、1週間そのまま浸けて同じようにアルコールをやってみたのですが、全く変わらない。これは明らかに何か悪いものが付着している、このまま乾燥させたのでは間違いなくかびが生えて、どんどん駄目になってしまうということで、これは奈良文化財研究所にお願いしました。

本来は三陸の海はきれいな海水のはずですが、今回は、車の油やヘドロなどが混じったような水で、何が付着しているのか分からない。最初にまず除菌をしなければいけないということがこの段階で分かりました。びっくりしたのは、よく脱脂綿に入れているのですが、海水が入ったら、その脱脂綿が真っ黒に染まるのです。その真っ黒に染まった脱脂綿にパックされていると、骨角器は炭化物のように真っ黒になってしまうのです。これは過酸化水素水に入れるときれいにはなるのですが、自然のものなのでできるだけ薬品は使いたくないということで、奈文研に状態を言って、今、いろいろとやっていただいているところです。

砂を落としただけで、まだ本格的な処理は全くしていないのですが、それでもかびがどんどん発生するというので、救援委員会にお願いして、図書室を使って、10月に燻蒸をしました。

被災した事実を伝えるための活動

博物館は休館状態ですが、博物館は駄目になったわけではないと知らしめなければいけないということで、国立科学博物館の恐竜博で、陸前高田市立博物館の化石やツチクジラのシッポのFRPを取ったところなど標本レスキューの展示をして、現状を報告していただきました。

遠野市では昨年4月から遠野文化研究センターを立ち上げまして、最初のテーマが文化による復興ということで、こちらでは「東日本大震災と文化財レスキュー」展をやっていただきました。海と貝のミュージアムにあった世界最大級のオオジャコガイなどを出して、「ふるさとの宝は失われていない！」というテーマで展示していただきました。



「文化財を救え！東日本大震災と文化財レスキュー」展（遠野市立博物館 23. 7. 22 ～ 9. 29）

作業をしている生出小学校の近くにコミュニティセンターがありまして、そこで毎年、木炭まつりがあります。そのときに博物館で何かやってもらえませんかということで、「陸前高田市立博物館の被災状況」の展示を行いました。科博や倉敷から提供していただいたケースを使って、これだけの資料を生出小学校で処理しているという現状を 2,000 人の方々に見ていただきました。

それから、出前博物館を復活させました。これはずっとやっていたことで、私も復活させたかったのですが、一人では難しいということで、国立科学博物館の真鍋先生のご協力をいただき 8 月に復活させました。講師陣も真鍋先生、千葉県立中央博物館の加藤さん、静岡科学館の高橋さんをお願いしました。これはシリーズ化されて 4 回行っています。遠野北小学校では津波をテーマとした授業を出前博物館でやっています。



第 1 回（国立科学博物館真鍋真先生）
「恐竜のおはなし」（8 月 30 日）



第 2 回（真鍋真先生・静岡科学館高橋みどり先生・
陸前高田市博熊谷）「恐竜と気仙隕石」（9 月 30 日）



第 3 回（千葉県立中央博物館加藤久佳先生）
陸前高田の化石とレプリカ作成（11 月 30 日）

今後の課題

4 館で 31 万点の資料を本格処理する前に安定化しなければなりません。除菌、脱塩、乾燥してきれいな状態にするのに膨大に時間がかかるということで、その体制の確立が課題です。今 10 ～ 11 人のスタッフがいますが、嘱託が 3 名と職員は私一人で、そのほかは臨時なので、それを嘱託にしたいということで、今、市に掛け合って、来年度からはしっかりとした体制が作れるかと思っています。今は、海と貝のミュージアムと博物館の仮収蔵施設という形になっているのですが、名実ともに旧生出小学校を博物館にしようと市の教育委員会でも考えていただいています。

それから、資料の復元率を回収率レベルまで上げられるのかというのが大きな課題です。

海水損資料の安定化処理の方法は未確立の部分が多いので、保存科学の方々にも試行錯誤していただいています。海水損した資料そのものを使って実験をするという感じですが、保存科学の先生方からの指導助言が今後必要だと感じています。

一番大きいのは収蔵場所の確保です。旧生小小学校は普通の学校ですので、空調設備も何もない。資料の保管という点からいえば非常に劣悪な状態が続いています。来年度から少しずつ教室にエアコンを入れるなどやっていきたいと思います。全国にお願いしている資料がきれいになって返ってきても、今の生小小学校ではまたかびてしまうという状況がありますので、当面は申し訳ないのですが、県立博物館でお預かりいただくという状況が続いています。

それから、安定化処理に対する財政的な支援が必要です。文化庁で被災ミュージアム再興事業というのがあるのですが、ホームページを見る限りでは、きれいになったものを収蔵する場所、きれいになったものの修理です。面倒を見てくれるのは修理だけで、きれいにするまでの安定化処理に膨大な時間がかかります。要綱がまだ示されてはおりませんが、修理にはその前段階として安定化処理という大切な処理があるということを考えていただきたいです。

今後の備えとして

今後の備えとして、災害時における支援のための協定があればいいと思います。今回すごく思ったのは、要請がなければ動けないというところがあるのです。動きたいけれども、陸前高田市から要請が上がってこないから動けない。要請を出したくても出せない。連絡を取りたくても電話が通じない、交通手段もあのころはガソリンがないという状況でした。われわれがレスキューに入れたのは4月1日からで、約3～4週間すぎたあたりから動けたのですが、その間の資料の劣化を考えると、動ける方々に動いていただければ助かったという部分もあります。取りあえず現地に入っていただいて、状況が分かる人間がいるはずなので、その人間とコンタクトを取って、動いていただける体制を今後築いていければいいと思いました。

今回は特に自然史系の方々が横のつながりで動いていただいたのですが、われわれは、内情がよく分からなかったために、文化財レスキューという事業があって、それで来てくれていたのかなと思っていたのですが、手弁当で皆さんに来ていただいていたのです。それを知ってしまうとお願いしづらい部分もあるので、後になってからでもいいので、すぐ動ける方々の旅費などを文化財レスキューで見えていただければ本当に動きやすかったらと思います。

資料の一時避難場所の確保は、平時のときから考えていただきたいです。今回はたまたま旧生小小学校が閉校になって空いたので、そこに入れることができたのですが、大きな災害の場合は、残った公共施設はすべて遺体安置所や支援物資の置き場や事務所に使われたりで、ほとんど使える場所はありません。何かあったときに資料を動かせる場所は常日ごろから確保しておく、あるいはそういうことを考えておくことは非常に大事だなと思いました。

データの共有化ということで、今回パソコンは引っ張り出せたのですが、データは戻りませんでした。データを共有化して、ほかの館でデータが見られるという状況を作っておけば、後々の作業は楽なのかなと思います。今回、海と貝のミュージアムは、元館長に4年前にデータを流しておいたのです。その館長のお宅は被災していなかったのですが、4年前のデータが残っていました。少し古いですがデータがないよりは助かるということで、データは本当に重要です。

自然史資料のレスキューの最優先化と文化財としてのとらえ方の再考も重要です。今回は、被災文化財等救援委員会の「等」の部分で自然史を救っていただいたのですが、あの文言の対象には自然史の資料は入っていないのです。漁撈用具などは三陸の海があって初めて形成されてきた文化で、その背景には自然が大きくかかわっています。自然史のものも含んで文化財と考える。世界遺産であれば自然遺産があるのと同じで、文化財に対して、自然文化財などの形でとらえていただく。資料を救うときは、自然だろうが人文だろうか関係なく、すべてレスキューするというスタンスに立ってやっていただかないと難しいのです。

文化財レスキューでは、古文書が最優先されるのですが、われわれの中では古文書は2番目か3番目になりました。というのは、和紙と墨は強いです。最初にレスキューしなければならないのは自然史系の資料の植物標本、昆虫標本です。これは腐敗してしまったらどうしようもないです。高田の博物館の場合はあれだけがれきがあったので、がれきの撤去に時間がかかったのですが、最初にやるべきだったのはやはり自然史系の資料だったと思っています。

「文化財の残らない復興は本当の復興ではない」。これは自然史も含めてですが、今なお作業を続けておりますので、ぜひ今後ともよろしくお願いしたいと思います。